

図書館通信

111

○ 静岡大学附属図書館 ○

◎ 新入生，歓迎特集号 ◎



水と人生	清水 孝	1
経(たていと)と緯(よこいと)	米山 徹	3
「役に立たない」読書のすすめ	橋本健二	5
◎キーボードを覚えよう・・・3	◎雑誌のこと、複写のこと・・・5	◎見えない?!資料・・・6
◎お知らせ・・・8		

水 と 人 生

清水 孝

太古の昔、人間の生活の場は山すその小川の辺や泉の辺で、きれいな水の得られるところであった。木立のある水辺にたたずんでいると人間は気分が和らいでくる。水は人間に無限の恩恵を与えてくれる不思議な物質である。水辺の風景は人間にとって情感を養ってくれる心の故郷であろう。

水は人間の体重の約55%を占めており、飲水さえ確保していれば、かなり長期にわたり人間は生命を維持することができる。したがって水の得られやすいところに人間は住み着き、集落を作り、文明を育んできた。水は四季の変化に従って自然循環しており、同じ場に同じ様に巡ってくる。適当な場所を確保すれば、永い間その恩恵にあずかることができ、人間にとって安定した生活をいとなむことができる。

水は水蒸気となって大気中にとけ込み、雲や霧となってただよい、雨となって地表に落ち、激流となって岩を削り、流れ下って大地をうるおして、海に注ぐ。このような循環の中で人間は生活している。だから人間は水を神と崇め、人間の力の遠く及ばないものとして畏敬の念をいだいてきた。

治水工事は人間の共同体である国家が管理し、給水は市町村主体の共同体そのものが運営母体となって行っている大切な事業なのである。文明の進展とともに生活に伴う水

を人間は制御可能としてきた。流れにダムを築き、水路をうがって水のコントロールを永年にわたって積上げてきた。その結果、水があったらよいと思われるあらゆる場所に水を供給するシステムを完成させた。このシステムと技術は数千年にわたり営々と築かれてきたものであるが、完全無欠というわけにいかないようである。いまでも自然現象の気まぐれな変化を十分にカバーしきれないでいる。

去年の夏のように我々は少雨、渇水、猛暑には勝てず、水源となるダム湖の干上がった状況や、各地で行われた降雨を祈る祭事をTVが放映した。そこに映し出された人々の困惑と真剣な眼ざしは記憶に新しいところである。昨年のような少雨時でも十分な水を確保する固定設備を作ることは経済的に負担が大きすぎる。自然植生と人間の柔軟性によって持ちこたえた面も多々あったと思われるが、システム全体を見なおすよい試練と思えば進歩があるであろう。

日本における年間降水量は6,000億 m^3 と概算されている。しかし面積当たりの降水量は多くても、一人当たり水量としては世界的にみて少ない。そのうち用水として利用されているものは900億 m^3 と推定され、河川を通して通常に海へ流出する量は2,100億 m^3 、洪水時流出量は2,000億 m^3 、蒸発量は1,000億 m^3 と考えられている。利用水900億 m^3 のうち上水道用水は大凡150億 m^3 、工業用水は200億 m^3 、農業用水は550億 m^3 と推定されている。用水として利用されていない水も山野を潤し、樹木、農産物を育て、国土を浄化する役割を担っている。

水の配分は利害関係が厳しく、昔からの慣行もあり、争いが絶えない問題でもある。古来日本において水は安易に、しかも大量に得られたため、浪費することを湯水の如く使うといわれて来たが、現代における水のコストを調べてみると、必ずしも安いとはいえない状態になりつつある。

日本における1 m^3 あたりのコストは上水道用水で約60円、工業用水で約20円である。最近、水の通り道から隔絶されたところで海水淡水化装置を導入して、水を得ているところもでてきている。この場合のコストは1 m^3 当たり200円位と算出されている。一人一日平均水の使用量は都市部で約500 ℓ であり、とても人間の力で自由に運べる量ではない。したがって古来人間は水の得られやすいところに住み、現代は工学技術の力でもって、人間の住みやすい場所に水を供給するということになってきた。傍らの水栓を開ければ何時でも大量の水を得ることができる。それに伴い水に対する情感もしだいに変化しつつあるのではないかとと思われる。

このようなことに危機感を持った識者の提言もあり、最近では親水性を重んじた河川の改修も行われるようになってきた。さらにビルの谷間の空間や駅前広場等に噴水や流水等がしつらえられているところを見かけるようになってきた。しかしながら、その昔、自然のせせらぎに親しんだ人間の情感のレベルにまで高めることができたかどうか疑問であろう。都会の喧噪の中であくせく働く現代人にとって、鴨長明の“方丈記”にみる如き、人生の流転と水の流れとの重なりは、現代人の情感の中にはないのかもしれない。生活に必要な水が容易に得られることになれたしんだ人々にとって、水は単なるものの一つであるに過ぎない。

しかしながら都市整備の不備のために、各個に散発的に起こる洪水災害は一般に人災と言われているが、生命の危険にせまるものにまではなっていない。市街地を流れる川幅は狭められてしまっていて細々と流れている。そのため少し多量の雨が市街地に降ると川から水があふれ出てしまう。低地部の市街は水びたしになり被害が頻発することになる。これを避けるために莫大な費用をかけて地下に貯水池を作ったりしている。まことに本末転倒のようなことをやっているといわねばならない。

水を大切にすることというのは、大事に使用するというだけでなく、自然における水の循環そのものを大切にすることであろう。これから自然と調和した豊かな人間社会を築こうとする我々にとって、水とのかかわりは避けることのできない重要な課題である。

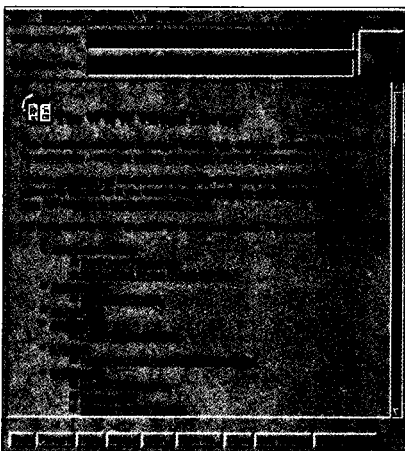
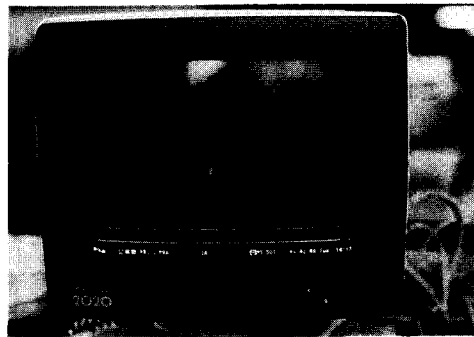
(浜松分館長)

キーボードを覚えよう

図書館に行くと入り口ゲートの右方にずらりと並んだ端末装置類が見える。現在の大学図書館では、これらを活用しないと、その機能のほんの一部を使ったことにしかならないので、是非、その使い方をマスターしてほしい。

装置群は、その機能により、幾つかのグループに分けることが出来る。

① 本図書館が所蔵する図書や雑誌の状況を調べるためのもので、アクセスするコンピュータの違いにより、ふたつに分れる。図書館のコンピュータ(上図の画面から始まるもの)と、情報処理センターのものである。センター分については学内LANを通じて各研究室内のパソコン等からも見ることができる。



② CD-ROMや雑誌のフロッピー版を検索するもの。国立国会図書館の蔵書目録や朝日新聞の全文が検索出来るものなどがある。

③ インターネットにアクセスできるもの。左図は、その代表的画面で、ここから世界中の図書館等のシステムに入っていくことができる。

以上のものの中には、カタカナでも使えるものがあるが、コマンド等は基本的にはアルファベットを使用するので、そのキーボードに親んでいただきたい。

経 (たていと) と 緯 (よこいと)

米山 徹

新入生の皆さん入学おめでとう。在学生の皆さん進級おめでとう。

「皆さんはどのような経緯(ケイイ)で今の学部・学科で勉強することとなったのでしょうか」と質問したときの「経緯」とはどんなことを指しているのでしょうか。この言葉はふつう、ある事件・事柄について、その事情・いきさつ・顛末という意味に使われます。しかし、各文字を別々に見ると表題に書いたように、経は縦糸、緯は横糸で、織物を織るとき、それぞれ違う方向の糸を表します。機織りで縦糸を張ってそれから順々に横糸を絡ませていきます。先ずしっかりとした縦糸がなければ物事は始まらないのです。皆さんも今のことを勉強し始めるに当たって、しっかりと縦糸を張ったと期待します。つまり、自分はこんなことに興味があるということが先ずあったでしょう。次に横糸としては、家族の状況や家庭の経済条件など、いろいろあったでしょう。それらをふまえて自分が今どういう位置にいるのか、どういう状態なのかを知るのは重要なことです。

次に、これらの文字が織物から離れて使われる例を挙げましょう。地球上の位置を表すのに、北緯何度、東経何度などと言います。地球儀の上に縦糸と横糸を張ったような経線と緯線があるのを思い出して下さい。縦糸はまた子午線(シゴセン)と言います。子(ねずみ)と午(うま)が何を表わすか、これ以上はここではモウ(丑ではない)説明しません。また、仏教でお経(キョウ:これは呉音(ゴオン)といわれる古い読み方)というのも、教えの重要な縦糸ということです。儒教でも四書五経(シショゴキョウ)といって重要な書物をまとめ、経書(ケイショ:新しい読み方・漢音(カンオン))と言います。

文武両道とよくいわれますが、経文緯武(ケイブンイブ)という言葉があって、文を経(たて)とし武を緯(よこ)とするという考えが昔からあります。この文とは今で言えば学問のことで、武はそのための身体的条件を整えることと解釈すると素直に納得できます。風邪をひくなどして身体の調子をくずさないようにくれぐれも注意して下さい。また、学問も今は文系であるとか理系であると(無理に)分類して、なにを勉強しなければ・・・と考えるのが普通なのですが、私は、文と理どちらの事柄も必要であると思っています。例えば物理を勉強するには、(初めはいいとして)そのうち必ず英語が必要になります。経済学なら(よくは知りませんが)微分や行列が必要になるでしょう。初めからそのつもりで(いわゆる)文系と理系と両方のことに目を配って勉強し、後で後悔することのないようにして下さい。

自分の縦糸の分野ではない資料・文献などを見るために、皆さんに是非おすすめしたいのが、図書館の活用です。取りあえず手軽なものを挙げると、4階の入り口に入って階段を1階上った所に4つの箱があり各分野の各種新書・文庫がいっぱい詰まっています。私もしばしば行っては、眺めています。また、ここに具体的に挙げることはしませんが、図書だけでなく、いろいろなAV資料も揃っています。初めに書いた「経緯」の各文

字の解説も、4階の入り口に入ってカウンターの前を右に曲がって奥へ進んだ所にある辞書の配架部分にある、白川 静「字統」(1984年:平凡社)にたいへん興味深く載っています。少しばかり次に紹介しましょう。

どのようにして「経」と「緯」の文字が出来たのでしょうか。経の文字の右半分(つくり)はもとは𦉰(くび)の左半分の形をしている象形文字でした。これは上下に横木があって中間に糸が張ってある形であって、今の経の右半分はそれを省略した形です。そのことから、いろいろな事柄で、垂直で上下方向に力の働いているところをいいます。人体ではさきほど出た𦉰(ケイ)、草木では𦉰(ケイ:くき)、道路では𦉰(ケイ:まっすぐ)に歩いて行けるみち)などです。車𦉰はなぜ「かるい」の意味になったのかは皆さんのお楽しみに取っておきます。「緯」について書くスペースがなくなってしまいました。どちらとも是非図書館で調べてみてください。

今後とも自分の縦糸と横糸を十分に張りめぐらして、充実した人生を送って下さい。

(©Yoneyama, Tohru: 理学部・物理学)

雑誌のこと、複写のこと。

新入生の時には意識しないだろうが、学年が進むにつれて、大学の図書館では雑誌の占める割合が大きいことに気がつくかも知れない。資料購入費からみても、その半分近くは雑誌の購入に当てられている。

試験期が近づくとコピー機の前はひとだかりで、試験に出そうな図書の一部分を複写しようとする者がいっぱいだが、これはあまり賢い利用者とは言いがたい(中には、友達の手帳のコピーをしようとする者もいるが、こちらはルール違反。図書館内のコピー機では、図書館の所蔵資料しか複写できません)。

そんな中に、何冊もの雑誌を抱え、該当のページの複写にいそしむ学生を見かけることがある。その彼あるいは彼女(最近はこちらの方が多い)こそが、図書館側からみた賢い利用者というもの。サービスにも力が入る。高校までの勉強では、図書だけで十分にこと足りたが、大学では、特に意識的に学ぼうとすれば、雑誌の記事・論文がどうしても必要になってくる。その形でしか手に入らないことが多いし、個々の図書館ですべての雑誌を取り揃えることは不可能である。それどころか必要とするものの半分も受入れできれば上出来といえる。

3ページのコラム中の機器類の過半は雑誌の記事・論文にターゲットを絞ったものだし、図書館としてもILL(図書館間相互利用サービス)に力を入れていて、日本語および西欧諸国で公刊された雑誌の記事・論文ならば、よほど特殊なものでない限り、さまざま、その原文を手に入れることが出来る体制が整っている。ウソだと思ったら、一度、参考調査係を訪ねていただきたい。

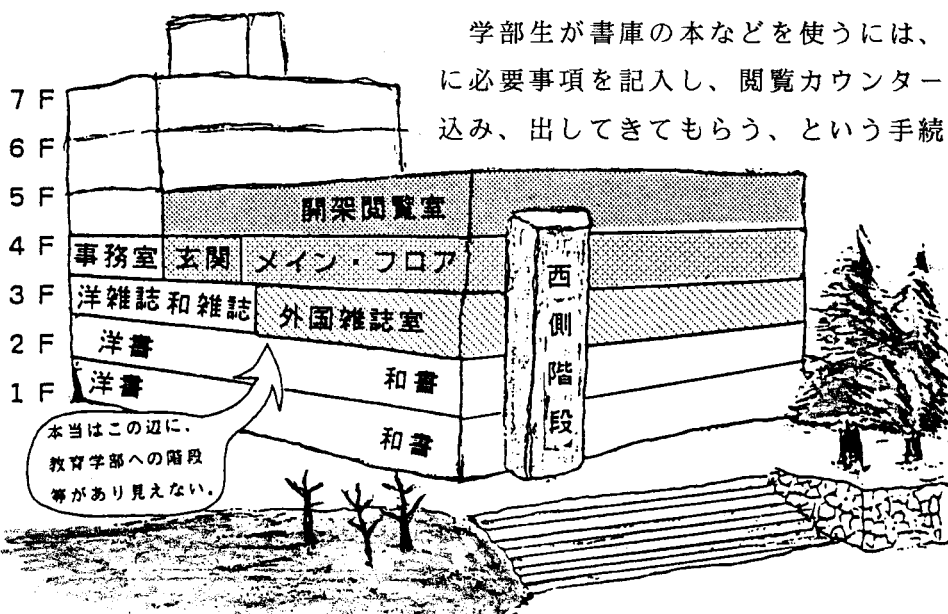
見えない?! 資料。

図書館の利用案内等を読むと、蔵書数50万冊とか、60万冊とかとある。そこで図書館に行ってみるが、どう考えても、そんなに本があるようには思えない。入り口があるメイン・フロアに1万冊位。その上の開架閲覧室にしたところで、せいぜい10万冊といった感じである。(それどころか、実際は両者あわせて約8万冊である)それに、入学時のオリエンテーションで説明にきた図書館の人が、「大学の図書館と高校までの図書室との、最大の違いは、洋書がたくさんあることだ。」と力説していたが、その外国語の本なんか、ほとんどない。雑誌にしても、約15,000種類なんて書いてあるが、メイン・フロアに200種位だし、3階の外国語雑誌室に1,000種あるかどうかだ。

下の図を見ていただきたい。図書館を教養部の側から眺めた姿のつमりの図。通常、学部生が自由に出入りできるのは、「網」のかかっている部分だけである。図書館の建物の、ほんの一部分にすぎない。しかも、これらは閲覧室を兼ねているので、本が並べられている場所は、ほんのわずか。

図の中の、洋雑誌、和雑誌、洋書、和書と書かれている部分が書庫で、そこに本や雑誌が収められている。面積比にして「網」の部分の約4倍、こちらには閲覧机等は無いので、多量の本や雑誌が入ることになる。50万冊とか15,000種というのは、ここにある分もふくめての話なのである。大多数の本や雑誌は見えないわけだ。

平地にある建物なら、メイン・フロアや開架閲覧室が建物の一部分でしかないことを、よほど鈍感な人でない限り気付くのだが、本図書館のように傾斜地にあると、それらで建物のほとんどすべて、と思い込んでしまうようで、書庫のことが思い浮かばない人も多いみたい。書庫の本を一度も使わず卒業してしまう人が多数というのが実状。



学部生が書庫の本などを使うには、「資料請求票」に必要事項を記入し、閲覧カウンターの係員に申し込み、出してくてもらふ、という手続きになる。

書庫にどんな本や雑誌が収蔵されているかは、端末あるいはカード目録で調べていただく、ということになる。

「役に立たない」読書のすすめ

橋本健二

人生の中には、楽しい読書ができる時期とできない時期がある。

できない時期の代表格は、もちろん受験生時代だ。ゆっくり読書する余裕などはないし、たとえあったとしても受験のことが頭から離れないから、つい受験に役立ちそうな本を、なんて考えてしまう。最近はどうか知らないが、私の受験生時代は小林秀雄や亀井勝一郎がよく出題された。高校の先生もすすめていたし、私も何冊か買って読んだ。

だけど、こんな読書は楽しいものではない。だいたい小林や亀井なんて、最近じゃ読む人いないでしょう。面白いから出題されたんじゃないで、出題しやすいから出題されただけなんだよね。それに、役に立つかどうかなんて考えていたら、読書は楽しくなくなる。スポーツやゲームが楽しいのは、役に立たないからだ。

役に立つか立たないかを考えずにふんだんに本を読める時期というのは、人生の中でそうあるものではない。その代表格が学生時代、特に卒論や就職活動の心配のない一・二年生の時期だ。これを使わない手はない。別にすすめるわけじゃないが、私は一・二年生の頃、いつも授業をサボって空いてる教室で本を読んでいた。おかげで試験はいつも落第スレスレ、いや、落とした単位もけっこうあった。でも今から考えると、学生時代でいちばん勉強になったのは、この時期の読書だったと思っている。

読書の習慣のない諸君も多いと思う。無理もない。今の日本の教育では、どんなに優れた文章も受験勉強の、試験で点数を取るための材料にされてしまう。単純に面白いと思ったり感動したというだけでは、点数は取れない。あれやこれやと強制的に解釈や感想を述べさせられた君達が、読書に親しみを感じなくなったとしても無理はない。

そして大学卒業後はどうなるか。町の本屋をのぞいて見たまえ、サラリーマン向けのビジネス書が山積みだ。リストラ(要するに、年長の人や業績の上がない人をクビにして、経費を節約すること)の仕方だとか、顧客に気に入られる方法だとか、そんな知識を身につけて少しでも出世しようとするサラリーマンたちの愛読書だ。

こんなサラリーマンたちはきっと、なんの疑問もなく受験勉強をして大学に入り、読書もせずに四年を過ごし、また受験勉強と同じ感覚でビジネス書を読んでいるのだろう。こんな連中がたくさんいるから、世界に冠たる日本株式会社は安泰だ。会社に気に入られようと競争しあう働き蜂。過労死するまで働きつづける悲しい会社の奴隷。一生懸命リストラにはげみ、次には自分がリストラされて文句を言わない機械の部分品。受験戦争とは、こんなサラリーマンを育てるための訓練だったのかもしれない。

合格するために勉強する、試験に出るから本を読む、単位のために授業に出る、会社のために残業する、出世のために本を読む。こうして私たちは、学ぶことの楽しみ、読

書の楽しみ、働くことの楽しみを奪われてきた。今こそ、奪われた楽しみを取り戻そうじゃないか。

その第一歩が、「役に立たない」読書だ。授業とも就職とも関係なく、手に取ってみてピンときた本を読む。興味のおもむくままに読む。君達には比較的恵まれた時間がある。繰り返し言うが、こんな読書の仕方がふんだんに可能な時期は、そうあるものじゃない。しかし、こんな読書の経験を積んでおけば、君の内面には会社に負けない自由な精神の領域が確保されるに違いない。考えようによってはこれは大変に「役に立つ」読書だ。どんなに大きな書店へ行っても、図書館ほど豊富な本をそろえていることはない。それに第一、書店では座って読むことができない。目的もなく書架の間を歩き回り、何か感じるものがあったら手に取ってページをめくる。目的がないのだから、順番に読む必要も、読み通す必要もない。必要があれば借りてもよいし、書店に注文してもよい。そんな気ままな読書が、君の精神を自由にする。これが私からの、「役に立たない」読書のすすめである。

(© Kenji Hashimoto:教養部・社会学)

ライブラリー・オリエンテーションのお知らせ

Part 1: 新入生のための図書館案内

図書館及び図書館資料の利用法+書庫案内(約30分)

4月12日(水)~4月18日(火)

13:30~, 15:30~ / 4F入口ゲート前から

Part 2: オンライン目録(OPAC)/静岡大学所蔵図書・雑誌の検索法

図書館専用機及び学内LAN接続端末による検索

4月19日(水)~4月25日(火)

13:30~16:00 随時 / 4F検索コーナー

Part 3: CD-ROM版及びフロッピー版データベースの利用法

国立国会図書館図書館所蔵目録・雑誌記事索引, CD-HIASK(朝日新聞全文記事, Books in Print Plus, カレント・コンテンツ(CCOD)等

5月15日(月)~5月19日(金)

13:30~16:00 随時 / 4F検索コーナー

あなたの、 利用票ができています

■閲覧カウンターに学生証を提示して

下さい。その場で発行します。

※学部生のみです。院生、研究生等は窓口にお問い合わせをして下さい。



静岡大学附属図書館報「図書館通信」

第25巻4号(通巻111号)

1995年 3月17日

発行所 静岡大学附属図書館

〒422 静岡市大谷836

☎ 054(237)1111

印刷所 (株)黒船印刷

© 1995 by Shizuoka University Library